

Title	アンドレ・ジイドにおける「顔」を巡る闘争
Sub Title	Les rivalités autour des visages dans les œuvres d'André Gide
Author	森, 香織(Mori, Kaori)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2013
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.18, (2013. ) ,p.17- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20131201-0017">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20131201-0017</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## アンドレ・ジイドにおける「顔」を巡る闘争

森 香織

アンドレ・ジイドは、その生涯において自己と他者の関係について、また、人が自己及び他者に対して作り出す虚像に似せて自己を矯正する努力について、極めて強い関心を持っていた作家である。このことはジイド自身日記で確認することが出来る<sup>1</sup>し、また自己と他者について日記において考察した箇所は枚挙に暇がない。そして、彼の作品はその関係のあり方及び抗争について、ジイドが紙上で観察、実験、省察する為の場であり、日記においてジイドが考察したのと同じような内容を様々な作中人物達がそれぞれの立場で、それぞれの方法で表明することになる。『贖金使い』でジイドの分身ともいえるエドゥアールが、彼を書く『贖金使い』の「深い主題」について、「現実世界と、我々がそこから作り出す像との抗争」« la rivalité du monde réel

---

<sup>1</sup> 以下は、他者に対して自らを矯正する努力に対する自身の関心についてジイドが述べた箇所の一部である。

« Le seul drame qui vraiment m'intéresse et que je voudrais toujours à nouveau relater, c'est le débat de tout être avec ce qui l'empêche d'être authentique, avec ce qui s'oppose à son intégrité, à son intégration. L'obstacle est le plus souvent en lui-même. Et tout le reste n'est qu'accident. » (André Gide, 3 juillet 1930, *Journal II* (1926-1950), édition établie, présentée et annotée par Éric Marty, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1997, p.213)

« Il est certaines choses que l'on fait *en se forçant*. Et je ne parle pas ici de l'effort pour réaliser son être ; mais d'un effort qui tend à fausser quelque peu sa ligne. Cet effort pour obtenir de soi quelque geste qui ne nous est pas naturel (dans le bien ou dans le mal) est des plus inquiétants. (...) Ce serait là un bien curieux sujet de roman. » (2 août 1930, *Journal II*, p.221) (強調は作者による。)

et de la représentation que nous nous en faisons. » (*Les faux-monnayeurs*, collection folio, Malesherbes, Gallimard, 2009, p.201) であると語っていることもこのことを示す証拠となるであろう。

ならば、ジイド作品を考察する上で、自己と他者の関係性のあり方や、他者が自分に対して作る虚像との抗争に着目することは必要不可欠であり、その際「顔」のテーマは重要なものの一つとなるだろう。

というのも、「顔」は、身体的にその面を所有する人物のものであると同時に、決して自分では自分の「顔」を直接見ることが出来ず、他者の視線の中に自らの「顔」を読み取ることでしか自らに到達できないという点で自分の外部に位置するものである。また、私達が自分の「顔」、または誰かの「顔」と呼ぶ、つまり「顔」を所有物であるように捉えるという点も、「顔」がその人の外に位置するものであると無意識に捉えているという証拠である。しかしその反面、所有しているのものであるということはその人の一部でもある。つまり、「顔」は自分であって自分でないものであり、それは即ち自己と他者がせめぎ合う場ということである。そのような「顔」は、ジイド作品においても何らかの意味を持つはずである。

よって、本論では、ジイド作品において、または作中人物達にとって「顔」がどの様に表出し、「顔」を見るという行為がどの様に機能しているかを考察し、それが自己と他者との関係性においてどのように関係しているかを考察する。その際、目や鼻等の部分の形や色、構成に重きが置かれ、あくまで身体的・物理的である程度の持続性をもった面を『顔』、内面の変化の結晶化の結果であり、瞬間的・部分的に表出する表情を≪顔≫、『顔』及び≪顔≫を内包し、人格及び身体全体の集斂の場であるもの、我々が普段漠然と顔と呼ぶものを「顔」として区別することにする。

また、二人の人間の間で「顔」を見るという行為が為される場面を、視線の状態によって大きく次の3つに分類することにする。即ち、まず一方が他方を見ていることだけが問題になる場面、次に両者が互いの方向を向き、その視線のぶつかり合いが問題になる場面、そして相手の「顔」を見ることよりも見ないこと、もしくは見る能力がないことが問題になる場面である。今

回は、最初の二つの場合、つまり、一方的にしる双方向にしる相手を「見る」ことが問題になる場面について考察する。それは、視線というものが先天的に孕む支配性や暴力性を介しての考察となるだろう。

### 1. 一方が他方を見るとき—支配からの自由と受容—

では、まず一方が他方を見ていることだけが問題となっている場面について考察する。その場面はさらに次のように分別される。まず、見られている人物が見ている人物に対して正面を向いておらず、見ている人物を見返さない場合、そして見られている人物が目を瞑っていたり、そもそも盲目で見ることができなかつたりすることにより、その視線自体が存在しない場合である。まず、第一の場合に含まれる例は多々あるが、その一番顕著な例は『狭き門』の中の次の場面である。

Alissa se tenait à quelques places devant moi. Je voyais de profil son visage ; je la regardais fixement, avec un tel oubli de moi qu'il me semblait que j'entendais à travers elle ces mots que j'écoutais éperdument. (*La porte étroite*, collection folio, Barcelone, Mercure de France, 2009, p.29)

これは、教会で牧師が「狭き門より入れ」という説教をするのを聞くところであるが、アリサはジェロームの何列か前に座っているので、彼は斜め後ろ、もしくは横からアリサの「顔」を見ていることになる。この時内面で起こったことを、彼は次のように語る。

Et le pasteur ramenait le début du texte, et je voyais cette porte étroite par laquelle il fallait s'efforcer d'entrer. (...) Et cette porte devenait encore la porte même de la chambre d'Alissa ; pour entrer je me réduisais, me vidais de tout ce qui subsistait en moi d'égoïsme... *Car étroite est la voie qui conduit à la Vie*, continuait le pasteur Vautier – et par-delà toute macération, toute tristesse, j'imaginai, je pressentais une autre joie, pure, mystique, séraphique et dont mon âme déjà s'assoiffait. (...) Tous deux nous avançons, vêtus de ces vêtements blancs dont nous parlait l'Apocalypse, nous tenant par la main et regardant un

même but... (*La porte étroite*, pp.30-31)

「アリサの寝室」とは、母親の不義に対して悲嘆に震えるアリサを目撃し、彼女を守ることを決意した部屋のことである。ジェロームが、神の許に至る「狭き門」をこの寝室のドアとして想像することは即ち、アリサを神とほぼ同値に置いているということであり、母親の不義という「非道德的」行為に対して、それを嘆くアリサの「高德」な部分が、あたかも彼女の全てであるかのように拡大解釈し、彼女こそが「徳」の象徴であると考えているということを表している。『背徳者』でマルスリーヌがミシェルに対して、「私達の視線は、それぞれの人に対して、注目している点を押し広げて誇張する」*« notre regard développe, exagère en chacun le point sur lequel il s'attache<sup>2</sup> »*の<sup>2</sup>と言いついて聞かせているが、ジェロームがアリサに対して注いでいる視線は正にこの視線であり、それはエドゥアールがその日記の中で「結晶化」と呼んだ現象であろう。また、アリサを通して牧師の言葉を聞いているような感覚に陥ること、そして二人で手と手を取って「狭き門」を、同じ目的に向かっていく姿を想像することは、彼が彼女と同化していると感じていることを表している。その為にあらゆる苦しみや悲しみを喜びに変える必要性を感じ、実際に彼は自己節制と自己犠牲に励み、それに対して悦びを感じるようになるわけだが、それは即ち彼の考える「アリサ」に似せて自分を矯正していることに他ならない。つまり、この時ジェロームの中に起こっているのは、アリサを「結晶化」し、それに似せて自分を矯正し、結果彼女と同化していると感じることであるが、これは『贋金使い』のなかでエドゥアールが「自己拡散の反エゴイズム」*« force anti-égoïste de décentralisation »* (*Les faux-monnayeurs*, p.76)と呼んだ現象である。

一方アリサの方ではこの時何を考えていたかについてはジェロームによ

---

<sup>2</sup> *L'immoraliste, Romans et récits, œuvres lyriques et dramatiques I*, édition publiée sous la direction de Pierre Masson, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean Claude, Alain Gouilet, David H ; Walker et Jean-Michel Wittmann, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2009, p.683

ってもアリサによっても語られることはない為、ジェロームが書きとめた前後の彼女の発言によってしか測り知ることは出来ない。しかし、次の二人の会話は、ジェロームに対する彼女の態度をよく表している。

– N'es-tu pas assez fort pour marcher seul ? C'est tout seul que chacun de nous doit gagner Dieu.

– Mais c'est toi qui me montres la route.

– Pourquoi veux-tu chercher un autre guide que le Christ ?... Crois-tu que nous soyons jamais plus près l'un de l'autre que lorsque, chacun de nous deux oubliant l'autre, nous prions Dieu ?

– Oui, de nous réunir, interrompis-je ; c'est ce que je lui demande chaque matin et chaque soir.

– Est-ce que tu ne comprends pas ce que peut être la communion en Dieu ?

– Je la comprends de tout mon coeur : c'est se retrouver éperdument dans une même chose adorée. Il me semble que c'est précisément pour te retrouver que j'adore ce que je sais que tu adores aussi.

– Ton adoration n'est point pure.

– Ne m'en demande pas trop. Je ferais fi du ciel si je ne devais pas t'y retrouver.

»

Elle mit un doigt sur ses lèvres et un peu solennellement :

« *Recherchez premièrement le royaume de Dieu et sa justice.* » (*La porte étroite*, pp.37-38)

アリサと同化することを神へと至る道とほぼ同一視しているジェロームに対し、アリサはそれぞれが独立して神に向かうことの必要性を説く。つまり、アリサはジェロームに対して同化志向性を有しているわけではなく、彼の理想を受け入れてそれに相応しくなるよう自分を加工しようという姿勢も見られない。つまり、ジェロームの横からの視線はアリサに対して、マルスリーヌが前述の発言の後に言っていた、「私達はその人（見ている対象となる人物）が私達がそうであると思っている人物になるように強要する」« nous le faisons devenir ce que nous prétendons qu'il est » と言ったような力を持っていないことになる。正面から見られないアリサは、ジェロームが押し付

けてくる「自己拡散の反エゴイズム」からの独立を保っており、フロイト流に言えば、その監視の視線を内面化することはない為にジェロームの支配下に置かれることはない。そしてジェロームはこの場面以降もアリサに会うときは必ず彼女の背後から近付く。つまりアリサの「顔」が正面から見えない状態から彼女を見るのだが、それはこの場面以降もこの関係性が続いていくことを示唆すると考えられる。

では次に、第二の場合、つまり、「顔」を見られている相手が目を瞑っていたり盲目であったりするために、一方の視線が失われている場合について考察する。その一例は、『田園交響楽』における次の場面に見られる。

Ce qui me chagrînait davantage, c'est qu'Amélie eût osé dire cela devant Gertrude ; car bien que j'eusse pris ma femme à l'écart, elle avait élevé la voix assez pour que Gertrude l'entendît. Je me sentais moins triste qu'indigné, et quelques instants plus tard, comme Amélie nous avait laissés, m'étant approché de Gertrude, je pris sa petite main frêle et la portant à mon visage :

– Tu vois ! cette fois je n'ai pas pleuré.

– Non : cette fois, c'est mon tour, dit-elle, en s'efforçant de me sourire ; et son beau visage qu'elle levait vers moi, je vis soudain qu'il était inondé de larmes. (*La symphonie pastorale*, Paris, Gallimard, 1925 ; p.65)

これは牧師が妻アメリーとの諍いの後にジェルトリュードの「顔」を見る場面であるが、牧師を見返すはずのジェルトリュードの目は盲目であり、その視線は存在しない。見ている側の牧師はこの時、ジェルトリュードを純粹無垢で愛に満ちた幸福の化身として「結晶化」し、彼女をそうでなくす可能性のあるものを極力彼女から遠ざけようとしている。つまり、悪や罪や死について語ることを避け、彼女の外面の美しさから彼女の注意を背け、牧師の選んだ書物や聖書の中の言葉のみを彼女が読むことを望むのだが、それはその「結晶化」された姿へと彼女を矯正し、その枠に押し込むことである。

一方見られているジェルトリュードにはどのようなことが起こっているだろうか。ジェルトリュードの方は、自らが牧師の思い描くような人物である

と一切の疑念ももたずに考えている。つまり、愛と幸福に満ちており、罪とは無縁であるとする牧師が作り出したジェルトリュード像を何の抵抗もなく受け入れている。また、これに先立つ場面でジェルトリュードは、牧師が以前アメリーに責められたとき泣いていたのを知っていると言うのだが、この場面でジェルトリュードは牧師に代わって泣いている。つまり、牧師の魂と共振している、更に言えば牧師と同化しているように感じている。

いわば彼女は牧師の視線を内面化しているのだが、彼女にとってそれは「監視」ではなく、そこにあることが全くもって自然な視線であり、植物がその方向に向かって自ら成長することを促す太陽光のような視線である。視線による支配というような観点から見れば、アリサがジェロームに対して自由であったのに対し、ジェルトリュードは牧師の従順な被支配者であると言えるだろう。いやむしろ、自ら進んで牧師と同化しようとしていることから、受動的な被支配者というより、能動的に支配されることを求めているともいえるだろう。

一方の視線の不在が支配の受容を示すということは、『贋金使い』の次の場面でも確認される。

Olivier m'a tout aussitôt fait signe, a poussé sa mère pour que je puisse m'asseoir à côté de lui ; puis m'a pris la main et l'a longuement retenue dans la sienne. C'est la première fois qu'il agit aussi familièrement avec moi. Il a gardé les yeux fermés pendant presque toute l'interminable allocution du pasteur, ce qui m'a permis de le contempler longuement ; (...) (*Les Faux-monnayeurs*, p.101)

J'aurais voulu savoir ce que pensait Olivier ; je songeai qu'élevé en catholique, le culte protestant devait être nouveau pour lui et qu'il venait sans doute pour la première fois dans ce temple. La singulière faculté de dépersonnalisation qui me permet d'éprouver comme mienne l'émotion d'autrui, me forçait presque d'épouser les sensations d'Olivier, celles que j'imaginai qu'il devait avoir ; et bien, qu'il tint les yeux fermés, ou peut-être à cause de cela même, il me semblait que je voyais à sa place et pour la première fois ces murs nus, l'abstraite et blafarde lumière (...) (*Les Faux-monnayeurs*, p.102)

エドゥアールは目を閉じているオリヴィエの横「顔」を注視するが、この後エドゥアールは、オリヴィエの目を通してプロテスタント教会の内部を見ているような錯覚を起こし、その感動を共有していると夢想する。つまり、アリサの横顔を見るジェロームと同じように「自己拡散の反エゴイズム」を起こしている。実際にはオリヴィエはエドゥアールが想像したような感動は共有していなかったことは、彼が「顔」をエドゥアールに向けた際にわかるのだが、そういったエドゥアールの独りよがりの「自己拡散の反エゴイズム」は、上記の場合に準じて、見ているのが横顔であることによって表されると考えられる。しかし、エドゥアールが思い描くオリヴィエの虚像や感動が実際に共有されることはここではない一方で、オリヴィエはいつでもエドゥアールの気に入る自分というものを夢想していることを忘れてはならない。またこの場面では目を瞑り続けることでエドゥアールが自分を見続けることを承認している。つまり、オリヴィエは、横顔を向けることによってエドゥアールの視線による支配からの自由を保つと同時に、目を瞑ることによって、自分の上に影響力を及ぼそうとする視線の存在を許容する。この場面はエドゥアールが長い間悩まされるオリヴィエの掴みどころのなさ、常に傍らに寄り添っているように感じながらも掴もうとするとすぐに逃げを打たれてしまうような感じを象徴すると共に、見ている人物を正面から見返さない人物の独立性と、視線を失くす（視線を持っていない）人物の従順さを端的に表す場面であると言えるだろう。

以上、視線が交わらない場合について考察したが、ここで注記すべきは、見られている側の人物が、見ている側の視線からの支配に対し、能動的な抵抗を行っていないということ、両者の間に支配を巡る攻防がまだ起きていないということである。

## 2. 互いに互いを見合うとき (1) 一支配力の行使一

では、二人の人物が互いに互いを見合う場合はどうなるだろうか。ここでは、《顔》を見られた相手が見返す場合と互いが「顔」を見る場合で生起す

る効果、果たす機能が変わってくるので、両者をわけて考察する。まずは《顔》を見る場面を見てみよう。数多ある例の中で、もっともその効果を顕著に表すのは、『ロベール』の中で、ロベールが以下のように読者に対して抗弁する場面であるだろう。

Je lisais au pli de son front, à cette double barre verticale qui commençait de se dessiner entre ses sourcils, une obstination grandissante, un refus qu'elle n'opposait plus seulement aux vérités saintes, mais à tout ce que je pouvais lui dire, à tout ce qui venait de moi. L'ironique scrutation de son regard communiquait aux plus vertueuses manifestations de ma part, je ne sais quoi de contraint, de délibéré, d'affecté. Ou plutôt ce regard opérait sur moi à la manière d'un scalpel, détachant de moi cette action, cette parole ou ce geste, de sorte qu'ils parussent non plus tant nés vraiment de moi qu'adoptés. (*Robert, Romans et récits, œuvres lyriques et dramatiques II*, édition publiée sous la direction de Pierre Masson, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean Claude, Céline Dhérin, Alain Gouillet et David H. Walker, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2009, p.675)

ロベールという人物は、常に信心深く公明正大な立派な人物である自分を思い描き、そこに同化することを志向する人物である。しかし、妻のエヴリーヌはそれは欺瞞であり、偽善であると考えている。そしてロベールが彼女の「眉間に引かれ始めた二本の縦線」《double barre verticale qui commençait de se dessiner entre ses sourcils》や「皮肉っぽい探るような視線」《L'ironique scrutation de son regard》、つまり彼女の内面の表れ、表情（＝《顔》）を見る時、自分でも彼女の考えが本当なのではないかと感じるようになる。つまり、彼は自分を見ているエヴリーヌの《顔》を見ることで、自分の理想へ飛翔するための翼を挽がれ、地に引き戻され、彼女にとっての「ロベール」を押し付けられていることになる。

ここで、『贗金使い』でベルナルとローラが初めて会う場面も見てみることにする。

(...) Elle poussa soudain un petit cri, tout à fait différent du long gémissement de

tout à l'heure, glissa de côté, et l'instant d'après se trouva assise sur le tapis entre les bras de Bernarde qui s'empressait. Confus, mais amusé pourtant, il avait dû mettre genou à terre. Le visage de Laura se trouva donc tout près du sien ; il la regarda rougir ; elle fit effort pour se relever. (*Les Faux-monnayeurs*, p.130.)

この時ベルナルルが見ているのは、転んだ自分を見たベルナルルを見て「赤面した」ローラであり、恥じらいの現れ、つまり《顔》である。お互いが顔を見合わせたこの瞬間を語り手は「ベルナルルとローラの関係を決めた」《qui décida des relations de Bernard et de Laura》(*Les Faux-monnayeurs*, p.130) としているが、その関係性とは次のようなものである。即ち、自分が私生児であると知って、自由で勇敢な反逆者になろうと家出したベルナルルは、この後、ヴァンサンを許そうとするローラに美德の化身を見出す(=「結晶化」)のだが、結果、「それまで無限に思っていたあの自由に、あなた(ローラ)の法が境界を定め」《à cette liberté, qui me paraissait jusqu'alors infinie, vos lois ont tracé des limites》(*Les faux-monnayeurs*, p.195)、彼女の敬意に相応しい人間になるよう努力することを余儀なくされ、「今の僕は彼女を知る以前の僕とは同じ人間とは感じられない」《Je ne me sens plus le même qu'avant de l'avoir connu》(*Les faux-monnayeurs*, p.169)と語るに至る。つまり、《顔》の持ち主に対して「結晶化」を行い、そこに似せようとする為に、今までの自分とは正反対の人間に自分を位置づけようとしているのだが、その位置づけた先で「法」《lois》、即ち支配者となっているのは《顔》の持ち主であるローラである。

つまり、自分を見ている相手の《顔》を見るということは、自分の外部に自分を引っ張る相手の力に晒され、その支配下に入れられるということであり、自分を見ている相手に自分の《顔》を見せるということは、正に相手に「メスを入れるように」《à la manière d'un scalpel》相手を本来自分はそうであると信じている人物から切り離し、その人物の外部に位置づけて支配力を行使する行為であるといえるだろう。そして《顔》を見る人物は、同時に見られる人物でもあり、見るという行為(それは即ち相手を支配しようとする行為でもある)、正にその行為こそが、自分自身を被監視者にし、被支配者にする行為であるというジレンマを抱えることになる。(このジレンマは、エヴリ

一ヌの方でもまたロベールや神父によって「自由を渴望する背徳者」に無理やり還元され、ローラもベルナルの目に監視されて「美しい魂の持ち主」である自分を強要されていること、つまり相手の視線の支配に屈していることを予感させるものであるとも考えられる。）

そもそも《顔》とは、意味表示機能を有し、自己と他者との共振の場である。我々が他者の「顔」を見ることで自己を知ろうとするとき、我々は、自分が発した言葉や行った行為に対しての相手の表情の変化、内面の変化を観察し、その変化如何によって自らの言葉や行為がどの様に受け取られたのか、ひいては自分がどの様な人物であるのかを推測する。つまり、この時実際に見ているのは相手の《顔》である。そしてこの時、《顔》の解釈を巡って、両者はそのコードを共有しようと試みる、あるいは実際に共有するのだが、そうであるならば《顔》は、個別であったはずの自己と他者が出会い、合致しようとする、あるいは実際合致する場であるとも言え、他者方向への引力が発揮される場であるとも言えるだろう。更に、自分を規定する為の道具として《顔》を考えるならば、《顔》を見るという行為はそれ自体、自分にある特定の意味づけを行い、その意味、即ち他者との共通性の中に包含されることを、レヴィナスの言葉を借りれば「全体性」に吸収されることを前提とし、また許容する行為である。それは《顔》を見せている相手に支配されることを無意識に受け入れてしまう行為であるとも言えるだろう。相手の《顔》を見たロベールやベルナルが《顔》の持ち主によって外部に「自分」を引っ張られ、その支配下に入れられることは、こうした《顔》の特性によるものではないだろうか。

### 3. 互いに互いを見るとき (2) 一支配への抵抗

さて、このような視線の支配に晒された時、多くの登場人物達はそれに対する抵抗を行うが、それはどの様にして行われるのだろうか。まず、アリサの場合を見てみることにする。前述の通りジェロームの視線からの独立は保証されていたアリサであったが、ジェロームの視線は懲りることなく何度もアリサの見えない「顔」に注がれる。その絶えず自分に対して虚像を作り上

げようとする彼の視線に対して、彼女にとっての「現実」を提示しようとする時、アリサは次のような「顔」を提示する。

Qu'importait, après tout, qu'une nouvelle façon de coiffure, plate et tirée, durcît les traits de son visage comme pour en fausser l'expression ; qu'un malséant corsage, de couleur morne, d'étoffe laide au toucher, gauchît le rythme délicat de son corps... ce n'était rien à quoi elle ne pût porter remède, et dès le lendemain, pensai-je aveuglément, d'elle-même ou sur ma requête... (*La porte étroite*, p.133)

Le lendemain elle ne changea ni de coiffure, ni de corsage ; assise près de son père sur un banc devant la maison, elle reprit l'ouvrage de couture, de rapiécage plutôt qui l'avait occupée déjà dans la soirée. (...) Ce travail l'absorbait complètement, semblait-il, au point que ses lèvres en perdissent toute expression et ses yeux toute lueur. (*La porte étroite*, p.134)

ここでジェロームは、彼女が髪を引きつめて「顔立ち」« les traits de son visage » を引きつらせ、「表情」« expression » を歪めたり消したりしているのを見る。つまり、『顔』及び« 顔 » を故意に加工している「顔」を見ることになる。この直後、ジェロームは彼が思い描いていたアリサが幻であったとあって嘆く。つまりアリサは、敢えてある一つの意味を表示する『顔』<sup>3</sup>や« 顔 » を偽装し、それをその面前に提示することで、アリサを支配しようとする彼の視線を断ち切ることに成功するのである。そればかりか、この時のアリサは、ジェロームが作り出した自分の虚像を打ち砕くことによって、「アリサではなく神をその行為の目的とするジェローム」という彼女の理想のジェロームを作り上げようとしている。つまり、今度はアリサの方がジェ

---

<sup>3</sup> アリサの『顔』の中でジェロームが見ているのは、その「極端に目から上のほうに弧を描いた眉の線」« la ligne de ses sourcils, si extraordinairement relevés au-dessus des yeux » (*La porte étroite*, p.24) のみであることは、ジェロームが作中で認めることであるが、この眉は彼女の思慮深さの象徴であると捉えられており、ある一つの意味を表示する機能を果たすものであるという点で、ここでは« 顔 » とほぼ同じものとして扱われていると言えるだろう。

ロームに対して権力を振るおうとしているのである。よってアリサは、《顔》の支配性をもってジェロームに対して抵抗し、それを攻勢に出るための手段として使っていると言えるだろう。

次に、先ほどエヴリーヌの《顔》および視線によって彼女の支配下に入ってしまったロベールの場合、それに対する抵抗はどの様に行われるであろうか。以下は、『女の学校』の中の、ロベールの事故の知らせを受け、彼に会いに行った時のことをエヴリーヌが回想する場面である。

Ce qui m'a le plus effrayée lorsque j'ai revu Rovert, c'est un bandeau qui lui cachait une partie du visage. Mais il n'a là que des ecchymoses insignifiantes, dit Marchant. Robert pourtant ressent d'assez violentes douleurs de tête, qu'il supporte avec un courage et une résignation vraiment admirables. Après tout ce que j'ai déjà écrit ici, je dois ajouter que je me tourmentais de ce qu'il allait me dire ; ou plus exactement de l'agacement que je craignais d'en éprouver. Mais dès ses premiers mots, j'ai senti que je n'avais pas cessé de l'aimer.

« Je te demande pardon pour tout l'ennui que je vous cause » (*L'école des femmes, Romans et récits, œuvres lyriques et dramatiques II*, édition publiée sous la direction de Pierre Masson, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean Claude, Céline Dhérin, Alain Gouilet et David H. Walker, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2009, p. 624)

この時ロベールは、実際には青痣しかない顔の上に、本来必要のない包帯を巻いて、その「顔」の一部を隠している。そしてその状態で発せられた労りの言葉を聞いたエヴリーヌは、再び結婚前の様な愛情を（一瞬ではあるが）ロベールに感じることになる。つまり彼は、自分を「偽善的で欺瞞に満ちた人物」に還元し、そうであるように監視するエヴリーヌの視線に抗う手段として「顔」を隠すということを行っており、その隠された「顔」によって再び結婚前のようにエヴリーヌに対して影響力を振るおうとするのである。そのロベールの権力は間もなく失われるのだが、ロベールはその後もこの包帯で「顔」を隠すことに執着する。恰も隠された「顔」は、それを見る相手に新たな《顔》を付与することが出来る（つまり自分が還元されている意味を

変えることが出来る) とでも言うかのようである。

ここで興味深いのはアリサにしろ、ロベールにしろ、「顔」を正面から見せることでは十分としていないことである。「顔」というのは、レヴィナスの言葉を借りれば、《顔》が「全体性」への包含、他者による領土化を象徴する場であるのに対して、それへの抵抗を示す場である。実際、作中人物達の発言には、「顔」を見ること自体が、自分が相手に対して作り出していた虚像の崩壊を意味する行為であると示すものが多い。以下の『田園交響楽』の牧師の発言はその顕著なものの一つである。

L'idée de devoir être vu par elle, qui jusqu'alors m'aimait sans me voir – cette idée me cause une gêne intolérable. Va-t-elle me reconnaître ? Pour la première fois de ma vie j'interroge anxieusement les miroirs. Si je sens son regard moins indulgent que n'était son cœur, et moins aimant, que deviendrai-je ? (*La symphonie pastorale*, p.143.)

これまで牧師の視線とそれに伴う「結晶化」を「盲目的に」受容していたジェルトリュードは、彼女自身、自分を正しいほうに導いてくれる愛と幸福の伝道師として、また自分を愛し自分も愛している人物として彼を「結晶化」し、その彼に同化しようと「自己拡散の反エゴイズム」を行っていた。しかしここで牧師は、手術によって彼女の目が見えるようになり、彼の「顔」が見られることが、彼女が思い描いている自分とは違う自分を明らかにし、彼らの間にある魂の共振関係を崩壊させるのではないかという予感に怯えている。つまり、牧師の「顔」を見るという行為が、ジェルトリュードが牧師によって作り出す様似されていた牧師の虚像を打ち砕く行為と同値であり、ひいては彼女が牧師からの支配に抵抗するようになり、脱出を試みる契機となることを認めているのである。

そうであるならば、本来、アリサは自分の「顔」を正面から見ないジェロームに対して正面の「顔」を見せればよく、ロベールも、エヴリーヌに自分の「顔」を更によく覗き込ませればよいはずである。しかし、彼らはそれでは満足しない。アリサは「顔」を見せるだけでなく更にその上にある《顔》

を偽装することで新たな意味を自分の「顔」に付与し、ロベールは「顔」を隠すことで新たな意味（若しくは昔自分が還元されていた意味）へと自分を位置づけ直そうとするのである。そしてどちらにも共通することは、視線による支配を企む相手に対してただ抵抗し、そこから逃げ出そうとしているだけではなく、相手との意味のつけ合いにおいて自らの主導権を確保し、相手に対して今度は自分が権力を振るうことを企んでいるということである。アリサがそれに成功する一方で、ロベールはそれに失敗し、彼の「心から信心深く公明正大な人物」という意味への再弁別への執着が、最早エヴリーヌには滑稽にしか映らないとしても、ロベールの隠された「顔」は、彼の精一杯の闘争意志の表明である。

#### 4. 結び

以上、「顔」を見るということ、または見られるということについて、それが「自己拡散の反エゴイズム」という他者への「虚像」の押し付け及びそれに似せての自分自身を矯正する試みにおいていかなる役割を果たしていたか、そしてその「虚像」を押し付けようとする視線の支配に対して見られる人物がいかなる方法でいかなる態度をとっているかについて考察した。その結果、ある時は作中人物達はその「顔」の見方や見せ方によって自分の相手に対する立場を読者に提示する場として「顔」を利用していること、またある時は、作中人物同士のレベルにおいて、相手との関係性をコントロールしようとする闘争の場として「顔」を利用したりしていることが観察された。それは即ち、作者であるジイドが、「顔」を見る／見られるということ、それに関係する作中人物達の関係性を端的に象徴する道具として利用していたこと、そしてその関係性の変化、及びその変化のダイナミズムを「顔」の見方、及び見せ方の変化、またはそれを巡る闘争によって表現しようとしていたことを表すのだといえるだろう。そして何よりも、ジイドは、「顔」を使って我々人間という生き物が、如何に日々自己と他者との間で闘争を繰り返しているかを描き出したかったといえるだろう。

ジイド作品の作中人物達は皆、自分の意味を巡って、自分自身、他者、ま

たは他者に対して自分が作り出した虚像と闘っている。一切の闘争から無関係で永久に精神の平穩を確約された人物は誰一人としていない。相手の「顔」を故意に見ないことによって、その闘争から逃げ出そうとする人物もいるが、結局それが成功した人物はいないのである。もし、その闘争から最も遠いところにいる人物がいるとすれば、それは盲目のジェルトリュードと、自らの目を抉り取ったエディプであろう。しかし、ジェルトリュードも目が見えるようになるや否や、闘争に巻き込まれていた自分を知るであろうし、エディプも実際のところ全ての闘争を免れたわけではない。というのも、彼のその究極の自己犠牲は、「英雄的」であろうとする欺瞞にすぎないことをテゼが指摘するからである。つまり、エディプやラ・ペルーズ老人が嘆いていたように、皆が皆「神」の姦計に弄ばれ、手のひらで転がされている卑小な存在であり、それを免れたように思っても、結局はそれも「神」による罠にすぎず、永久に「神」の思惑通りに生きている自分を実感するに至るのである。

このことは「顔」を巡る作中人物達の闘争を俯瞰的に見つめる読者が必然的に見出す事実であるが、それらの作中人物達がジイドの一部であり、分身であり、鏡でもあり、子供でもあることを考える時、その闘争は、ジイド自身の、ひいてはジイドが観察する現実世界の人々の闘争の紙上への結集であることも実感されるのである。ならば、その「顔」を巡る闘争は、超越的存在に支配される世界の理不尽さや人間の卑小さを前に、為す術もなくもがくジイドの、そして同時に我々の魂の叫びの噴出の場である。ジイド作品の読者は、その「顔」を巡る闘争を通してジイドの魂の叫びを聞き、更にその闘争を見届けた後に自らを省みる時、自分自身の魂の叫びを聞くのだろう。